「宗教と社会」シンポで論議

宗教は暴力性を内在しているか

冷戦後の国際秩序をめぐって民族主義やナショナリズムが高まり、各地で紛争が激化しているが、宗教はそのことといかなる形でかかわっているのか。このほど東京の大正大学で開かれた「宗教と社会」学会のシンポジウム「宗教と民族・ナショナリズム」の中で、宗教は暴力性を内在しているのか、をめぐって論議がわいた。

宗教はなぜ、ナショナリズムの根拠とされやすいのか。宗教そのものが根源的に暴力性を備えているのか。スリランカではシンハラ仏教徒とタミル・ヒンズー教徒が激しく対立し、国家の存立を揺るがすような深刻な事態を招いている例をあげ、杉本良男氏(南山大学)は「暴力化した仏教、ナショナリズム化した仏教は、宗教の裏切りではないのか」と問いかけた。

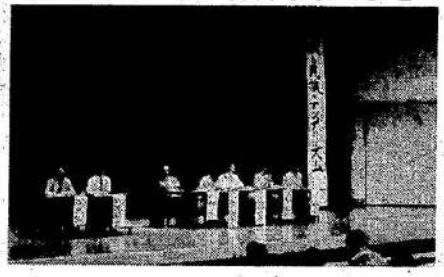
民族・集団のアイデンティティーの根拠として宗教は、最も強いものだ。その聖性や共同性をもとに宗教集団は、体系的な全体像を通して一つの閉じたシステムをもつ。個々人はその世界に依存し、「外部」からの進入に対して自己を保存するとき暴力をもつようになる。人を救うものが、暴力性を備えるという「宗教の逆説」。人々の存在の根拠をかけた「神々の闘争」。宗教の暴力性は、例外的な狂信的現象なのか、それ自体に内在しているのか、というのである。

これに対し、中牧弘允氏(国立民族学博物館)は「民族や国家は、個人が選択できない、論理を超えたものだ。宗教がそんな他の何かと結びついたときに暴力性をもつのではないか」と指摘。さらに民族の対立の背景には、まず経済的な格差があり、「宗教は民族、国家などの従属変数ではないか」との意見もある形でかかわっているのか。こった。その一方、布教の歴史を見ると、「外部」が「内部」になりうるとの思いで宗教が拡大を図るとき「外部」が「内部」に変わらないときに暴力が生じて、変わったときに布教になるという姿もある。

島薗進氏(東京大学)は「宗教は、内部の対立を排除するし、外部に対しても普遍性をもって世界に示してきた。宗教がいま、外部に対して普遍的な規範を示すことができなくなったことが問題ではないか」と語っていたが、情報化社会になって常に価値意識が相対化され続ける今日、宗教の「普遍性」とはなにか、という難題もある。

宗教がナショナリズムのもとになるとすれば、現代日本のナショナリズムの根源とはなにか。神々が共存している日本の宗教風土は世界に対してどこまで普遍性をもちうるのか。多彩で刺激的な課題が相次いで示された。

(学芸部・池田知隆)



大正大で開かれた「宗教と社会」学会のシンポジウム